クィア理論と日本文学
――欲望としてのクィア・リーディング――

中川成美

2015 年 1 月 9 日，10 日の二日間，本学国際言語文化研究所，ジェンダー研究会主催にて開催された国際カンファレンス「クィア理論と日本文学―欲望としてのクィア・リーディング―」について，以下の報告を記したい。

1990 年代に発足したクィア・スタディズはまさしく可能性に満ちたアクティヴな学問的思考の方法であった。フェミニズム理論からジェンダー研究への推移，およびその理論的な葛藤は，90 年代にあらたにクィア理論を産出して，以後ジュディス・バトラー，イブ・セジウィックらによって先導されていった。2000 年以降のジェンダー研究にとってクィア理論は看過することのできない基礎理論として確立されたと言えよう。しかしながら，日本にあってはそれらは社会学やアクティヴィストを中心とする研究の推進があり，文学研究に本格的に反映することは，英文学などわずかの事例を除いて殆ど中心的概念としては機能してこなかった。特に日本文学にあっては，文学作品を素材として提供はするものの，文学研究において充分の理論的な取り込みはなかったといってよかろう。クイア・リーディングが極めて重要な作品読解の鍵となりうる可能性について，日本文学研究は十分の眼を注いでこなかったと言わざるを得ない。

だが，理論的支柱の一人，セジウィックを引くまでもなく，欧米圏の主要な研究が文学の上で行われていることに注意しなければならないだろう。これはクィア理論が，方法としてあるばかりではなく，その実践であるクイア・リーディング（クィア的な読解）を通じて露わにされる，作品に隠蔽されてきたジェンダーの不当な配置，権力の見えざる行使，あるいは日常化された異質なるものの排除といった，作品に事前的な刻み込まれた「記憶」と「運動」を明示する具体的な機能をもっていることを気付かせていくのである。本カンファレンスではそのことを踏まえて，日本文学研究という範疇で，クィア理論の実践を試みてみたい。この問題に注視している世界の日本文学研究者を，古典文学研究，近代文学研究の別なく招聘，また募集して，本カンファレンスの開催にこぎつけた。

クイア理論は，往々にしてゲイ・スタディズ，レスビアン・スタディズにその出発の期限を持ち，当該領域の理論的進展に大きく寄与したのは勿論なのだが，実は社会的構成としての性の布置そのものへの懐疑を産出して，同性愛や性認知の問題にのみに限らない，ヘテロな性配置の問題にまで問題系を伸ばしている。またそれは意識と身体との異和やずれ，またそのことによって発生する外界認知の奇妙な錯綜や誤認を通じて構成される想像力の問題へ触れていくことになる。文学において根源的な内的想像力の発生と相関するこの領域については，これま

で文学はアイデンティフィケーションという範疇に置換することによって考えようとしてきた。だが，自己認知において無意識下に排除される声なき身体の相克を算入して考えたときに，文学作品は別の可能性を提示していくのではないだろうか。その意味で，日本文学に施されてきた解釈軸を打破していくような思考の実験を期待したい。重ねて言えば，日本文学（あるいは映画などの映像，そしてマンガ）をクイア・リーディングによって再発見するということは，性のみに固定されない内的欲望のさまざまな形を文学から見出していく作業となることを付け加えておきたい。そこに日本文学研究の新たな可能性を見出していくことになるであろう。

以下がカンファレンスのプログラムである。

【プログラム】

2015年1月9日（金）

開会挨拶・趣旨説明　　中川成美（立命館大学）

基調講演

「日本文学をクィア・セオリーで読む：漱石を例に」
キース・ヴィンセント（ボストン大学）
ディスカッサント　上野千鶴子（立命館大学特別招聘教授）
対談　　キース・ヴィンセント×上野千鶴子〔司会〕中川成美

第1セッション　　〔司会〕庄婕淳

「日本古典文学にみるクィアな欲望」　　木村朗子（津田塾大学）
「上方に置ける男色の描写――近松門左衛門と月岡雪鼎を例に」
アンドリュー・ガーストル（SOAS）

第2セッション　　〔司会〕中井祐希

「クィアテクストとしての「こころ」：翻訳学を通して」　　スティーブン・ドッド（SOAS）
「『青鞜』同人をめぐるジェンダーとセクシュアリティ――1910年代を中心に――」
呉佩珍（台湾政治大学）

2015年1月10日（土）

第3セッション

パネル「日本文学における性 / 交を再考する　――欲望の向く身体――」
パネラー　道下真貴（立命館大学大学院）
宮田絵里（立命館大学大学院）
岩本知恵（立命館大学大学院）
ディスカッサント　飯田祐子（名古屋大学）

第 4 セッション　〔司会〕小玉健志郎，木原将貴

「接触と流血の諸相――姫野カオルコ『受難』と映像表現の身体性――」

泉谷瞬（立命館大学大学院）

「多和田葉子の作品における「中性」への探求」　リゴ・トム（パリ第 4，第 7 大学大学院）

第 5 セッション　〔司会〕鄧麗霞

「一柳彗のオペラ「横尾忠則を歌う」の男性セクシュアリティー・プレゼンテーション」

フィリップ・フラヴィン（大阪経済法科大学）

「囚われの「女」たち：　声の空間」　ハナワ・ユキコ（NYU）

招待講演

「言語的カオスのクィア・リーディング : テキスト・イメージ・デザイヤー」

クレア・マリィ（メルボルン大学）

第 6 セッション　〔司会〕武田悠希

「惑星的思考としてのクイア理論」　トゥニ・クリストフ（東京大学）

「脱政治化という〈性の政治〉――村上春樹「偶然の旅人」を読む」

黒岩裕市（フェリス女学院大学）

総合討議　〔司会〕中川成美

コメンテーター　セシル坂井（パリ・ディドロ大学・東京大学客員教授）

開催 2 日間で，基調講演と対談，招待講演のほか，口頭発表 13 本全 6 セッションを設けるという充実したプログラムとなった。以上，プログラムからも明らかなように，日本文学という土壌で，古典文学から近代文学，また浮世絵，オペラ，越境文学，言語などの豊穣な領域に渉る問題が多岐にわたって提示された。クイア・スタディズと日本文学という観点から，各研究者の問題意識や課題が共有されることによって可能となった成果は大きい。また今後，この起点を足場として日本文学におけるクィア理論の理論構築，さらにはクイア・リーディングの可能性について継続して考えていきたいと思っている。

先ず，基調講演でキース・ヴィンセントは，日本文学研究で，クィア理論の重要性とそれを如何に実際の日本文学研究につなげていくかという問題に触れて，大変興味ある指摘をしている。それは研究対象，キース氏にあっては夏目漱石だが，その対象に対する研究者の主体のあり方について，深い洞察的な解釈をなした。それは，まさしく研究が「科学的」という名のもとに抑圧されてきた，「読者の作者への愛」という問題を提示されたところに，クィア･リーディングの可能性をみたい。分析的な読みの実践は確かに，対象をあらわな存在として認知することに貢献した。しかし，こと文学にあってそれだけで作品の「解釈・読解」が完成するわけではない。その作品，作家読者／私との関係性の追求にこそ，読みの実践は完成されるのではないかという，キース氏の見解は，文学研究の今後を考えていく上にも示唆に富んだ発言であった。クィア理論の根底的な目的をも含みこんだ，キース氏の実践は今後文学研究にあって無視しえ

ないものとなっていくであろう。

それは例えばタムシン・スパーゴの『フーコーとクィア理論』の中での，批判への応答として機能していくに違いない。

> クィア理論自体も，その抽象性言説の崇拝，日常世界への明らかな侮蔑のゆえに非難されてきている。これらの非難は，ポスト構造主義，ポストモダニズムの理論一般に不満を抱く者たちの声を反映している。さらに具体的に，クィア理論は抑圧の現実や権利と正義のために組織される運動の価値を無視している，軽視していると非難されてきた。差異や越境そのものを目的としてそれらに集中する余り，介入を前面に押し出すはずの姿勢が，政治的，知的，社会的な姿勢がひそかに傷つけられているとも見られている。クィアの一部の著作に見られるように，ジェンダーやアイデンティティーを，おおむね否定的で，封鎖的な構造や概念と見てしまう傾向が非難を招くのである。さらにクィアは，自身が認める以上に男権主義者のゲイ・アイデンティティーに寄りかかり過ぎているのではないかとも評されている。

会議での一つ一つの発表に注釈することはしないが，このような意識を概ね反映しながら，会議は進行したと思う。つまり，自らの問題として日本文学作品を考えようとする方向に於いて，この二日間の会議は有効であったと思いたいし，またそのようにしていきたいと願っている。それは文学を文学に取り戻す作業としてのクィア理論の充実をめざすことへの第一歩とも心得たい。

本カンファレンスには，本学ジェンダー研究会のメンバーを中心に企画して，国内外のクイア・スタディズに関心を持つ多数の研究者を招聘・公募し，本学の博士課程，修士課程の大学院生が運営やパネル発表という形で積極的に参加した。また本学2014年度後期「研究の国際化推進プログラム」の助成を得て，国内外の研究者がそれぞれの研究成果や知見を発信し問題意識を共有・交流する場を得たことに，謝意を表したい。